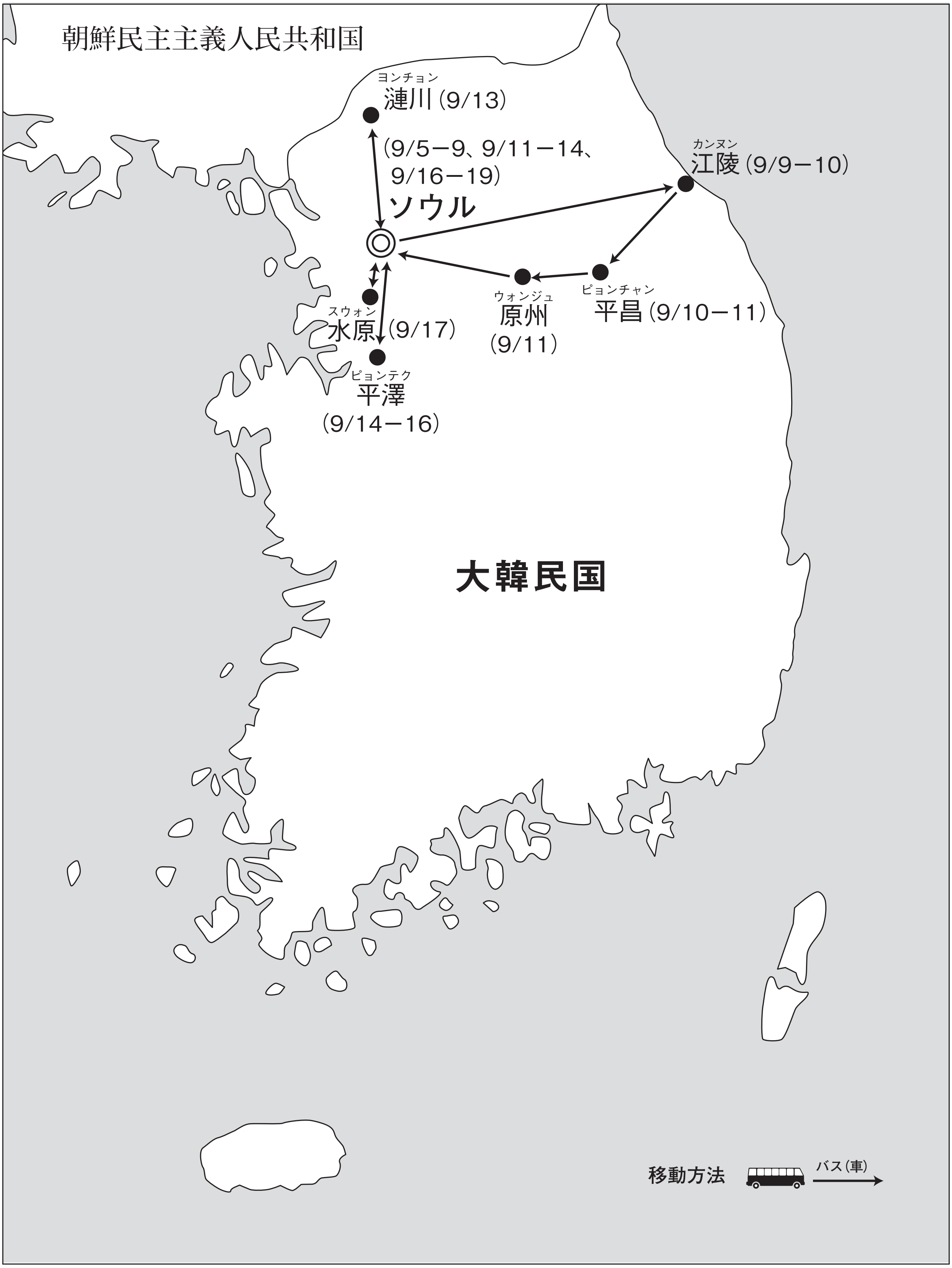
第2章
日本青年韓国派遣

行　動　地　図
行　動　記　録
訪問先・プログラム一覧
団　長　報　告
参加青年代表報告
ディスカッション成果

行 動 地 図

平成30年度　日本青年韓国派遣



行 動 記 録

平成30年度　日本青年韓国派遣

	月日	時間	行動日程	都市
1	9月5日 （水）	12:05 14:25 15:25－16:25 16:30－18:00 18:00－19:00 19:30	東京（羽田）発（OZ1075） ソウル（金浦）着 移動（金浦→ホテル） プログラムオリエンテーション 夕食 ホテル着	東京 金浦（キンポ） ソウル
2	9月6日 （木）	10:50－12:00 12:00－13:30 14:00－15:30 16:00－17:30 18:00－19:00 19:30	女性家族部表敬訪問 ・概要説明 ・青少年政策について ・質疑応答 女性家族部主催歓迎昼食会 大韓民国歴史博物館訪問 在大韓民国日本国大使館公報文化院表敬訪問 ・概要説明 ・質疑応答 ・施設見学 夕食 ホテル着	
3	9月7日 （金）	11:00－12:00 12:00－13:00 13:00－15:30 15:30－16:00 16:00－18:00 18:30－21:30 22:00－24:00	**＜日韓青少年交流会＞** ・開会式（団長挨拶） ・オリエンテーション 昼食 レクリエーション チェックイン 文化交流会リハーサル 文化交流会及び夕食 文化交流会　親善の夜	
4	9月8日 （土）	9:00－ 9:30 9:30－12:00 12:00－13:00 13:00－14:50 15:00－15:30 15:40－15:50 15:50－18:00 18:00－18:40 18:40－19:00 20:00	ディスカッション　オリエンテーション ディスカッション　第1部 **＜テーマ：多文化共生＞** ① 外国人労働者 ② ジェンダー ③ 宗教 ④ 障害者 ⑤ 教育 昼食 ディスカッション　第2部 ディスカッション　成果発表 休憩 共同体活動 夕食 閉会式 ホテル着	
5	9月9日 （日）	10:00－12:00 12:00－13:00 13:00－16:00 16:00－19:30 19:40	日韓交流おまつり参観 昼食 移動（ソウル→江陵） 青少年活動振興センター江陵分所訪問 ・機関紹介、江陵・青少年・多文化に関する紹介 ・日本文化紹介 ・夕食 ホテル着	江陵（カンヌン）

	月日	時間	行動日程	都市
6	9月10日 （月）	10:00－11:30	江陵市健康家庭多文化家族支援センター訪問	
			・機関及び事業紹介、施設案内	
			・日本結婚移住者との懇談会	
		12:00－13:00	昼食	
		13:00－14:00	移動（江陵→平昌）	平昌(ピョンチャン)
		14:30－17:30	国立平昌青少年修練院訪問	
			・歓迎の挨拶及び挨拶、機関及び事業紹介	
			・体験活動	
		18:00－18:30	夕食	
		18:40－21:30	団別研修	
		21:30	宿所着	
7	9月11日 （火）	9:30－11:30	国立横城（フェンソン）スプチェウォン山林癒しプログラム参加	
			・野外山林浴（山林体操、森の中歩き、瞑想）	
			・森とのコミュニケーション（アロママッサージ、裸足で歩き）	
		12:00－13:00	昼食	
		13:00－14:00	移動（平昌→原州）	原州(ウォンジュ)
		14:30－16:20	原州市障害者総合福祉機関訪問	
			・機関・事業紹介、施設見学	
			・日本文化教室	
		16:20－18:30	移動（原州→ソウル）	ソウル
		18:30－19:30	夕食	
		19:30	ホテル着	
8	9月12日 （水）	10:00－12:00	希望製作所（市民社会参加 民間機関）見学	
			・事業紹介、施設見学	
			・青少年革新プロジェクト紹介	
		12:30－13:30	昼食	
		14:00－15:30	移住背景青少年支援財団訪問	
			・機関・事業紹介	
			・日本文化教室（文化公演、文化教室）	
		16:00－17:30	Nソウルタワー展望台	
		18:00－19:00	夕食	
		19:30	ホテル着	
9	9月13日 （木）	9:30－11:30	移動（ソウル→漣川）	漣川(ヨンチョン)
		11:30－12:30	昼食	
		13:00－17:00	韓半島統一未来センター見学	
		17:00－19:00	移動（漣川→ソウル）	ソウル
		19:00－20:00	夕食	
		20:30	ホテル着	
10	9月14日 （金）	10:00－12:00	韓国外国語大学日本語大学訪問	
			・講義：韓国紹介と日韓関係	
			・日本語大学の学生との交流会	
			（テーマ：日韓大学生の生活）	
		12:30－13:30	昼食	
		13:30－15:30	移動（ソウル→平澤）	平澤(ピョンテク)
		15:30－16:00	ホームステイ歓迎会	
11	9月15日 （土）	終日	ホームステイ	
12	9月16日 （日）	10:30	ホームステイ終了	
		12:00－13:30	移動（平澤→ソウル）	ソウル
		13:30－14:30	昼食	
		15:00－15:30	ホテル着・休憩	
		15:30－19:30	徳成女子大学日語日文学科サークルとの交流会	
			・徳成女子大 サークル紹介及び自己紹介	
			・日本文化紹介	
			・グループディスカッション、成果発表	
			・グループごとにツアー（徳壽宮など）及び自由夕食	
		20:00	ホテル着	
		20:00－22:00	団別研修	

	月日	時間	行動日程	都市
13	9月17日 （月）	9:30－12:00 12:00－13:00 13:00－14:30 14:30－16:00 16:30－18:30 18:30－20:00 20:00	韓国両性平等教育振興院訪問 ・性平等プログラム （両性平等政策共有、体験活動） 昼食 移動（ソウル→水原） サムスンイノベーションミュージアム訪問 水原伝統市場ツアー及び自由夕食 移動（水原→ソウル） ホテル着	水原（スウォン） ソウル
14	9月18日 （火）	10:00－17:30 17:30－19:30 20:00	ソウル文化ツアー（日韓既参加青年との交流会） ・仁寺洞（インサドン）ツアー、韓服体験、自由昼食 ・MBCWORLD 体験 ・光化門（クァンファムン）広場自由ツアー 歓送晩餐会 ホテル着	
15	9月19日 （水）	9:00－10:30 10:30－11:30 11:30－12:30 15:30 17:35	評価会 移動（ソウル→金浦） 昼食 ソウル（金浦）発（OZ1045） 東京（羽田）着	金浦（キンポ） 東京

訪問先・プログラム一覧

平成30年度　日本青年韓国派遣

9月6日

女性家族部

訪問先都市	ソウル
面　会　者	青少年活動振興課長 多文化家族課行政事務官 青少年活動振興課研究員
訪 問 概 要	女性家族部は、女性の地位向上、家族及び青少年に関する役割を担う国家行政機関である。今回の表敬訪問では、女性家族部の概要説明の後、質疑応答及び記念撮影が行われた。本事業は、女性家族部の支援なしでは成立しないことを再認識するとともに、日本青年代表である私たちへの期待の高さを窺うことができたため、改めて身の引き締まる思いであった。表敬訪問の後、女性家族部主催の昼食会が開かれた。

大韓民国歴史博物館

訪問先都市	ソウル
訪 問 概 要	大韓民国歴史博物館は、19世紀末開港期から現在に至るまでの韓国の近代史に関する資料を収集、展示及び調査研究をする博物館である。ボランティアガイドによる丁寧な説明を受けつつ、館内をゆっくり観覧した。日本では、学ぶことのない韓国側の視点で見た歴史を知ることで、日韓関係と韓国独立の経緯について理解を深めることができた。

在大韓民国日本国大使館公報文化院

訪問先都市	ソウル
面　会　者	副院長／一等書記官 一等書記官 主任（教育・スポーツ担当）
訪 問 概 要	在大韓民国日本国大使館公報文化院は、展示、公演及びワークショップ等を通じて、日本に関する情報を発信している。また、留学事業を運営する機関でもある。職員の方から日韓関係に対する情熱や思い、外務省職員としてのやりがいを伺うことで非常に魅力的な職務であると感じた。

9月7日

日韓青少年交流会

訪問先都市	ソウル
面　会　者	韓国青少年活動振興院部長 平成30年度日本派遣団団長 平成30年度日本派遣団副団長 平成30年度日本派遣団副団長
プログラム概要	韓国青年とレクリエーションやディスカッションを通じて、楽しく交流を行った。1泊2日と非常に短期間の交流ではあったが、両国の青年の絆を深めることができ、引き続きこの関係を発展させることができるように努力していきたい。

9月9日

日韓交流おまつり

訪問先都市	ソウル
プログラム概要	日韓交流おまつりは、今年で14回目を数える日韓文化交流の祭典である。特に今年は、1998年に日本の小渕恵三総理大臣と韓国の金大中大統領が締結した「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」から20年ということもあり、会場は歓声と熱気に溢れていた。

9月10日

江陵市健康家庭多文化家族支援センター

訪問先都市	江陵
面　会　者	講師
プログラム概要	健康家庭多文化家族支援センターは、多様な家族支援政策を実行するために設立された女性家族部の機関である。日本人移住者の方から移住に関する講話を聞く中で、日本よりも韓国の方が移住者支援に関する制度やコミュニティーの活用が進んでいるように感じた。

国立平昌青少年修練院

訪問先都市	平昌
面　会　者	事業部長 事業部次長 事業部代理
プログラム概要	韓国青少年活動振興院（KYWA）の5つの修練院の1つであり、1998年に設立された最初の国立青少年活動施設である。体験活動中心の修練院として野外活動等に特化した施設である。団員同士体験活動を通じて、より交流を深めることができた。

9月11日

国立横城スプチェウォン

訪問先都市	平昌
プログラム概要	国立横城スプチェウォンは、青太山（チョンテサン）海抜680メートルに位置しており、韓国山林福祉振興院で運営している国家第一号山林教育センターである。広大な自然の中で、体を動かすことにより、団員全員リフレッシュをすることができた。

原州市障害者総合福祉機関

訪問先都市	原州
面　会　者	館長
プログラム概要	原州市障害者総合福祉機関は、2003年に設立された障害者のリハビリ、スキルアップ及び権利擁護等を通じて、生活に合わせた自立を支援する総合福祉機関である。日本の文化紹介を通じて、障害者の方々と交流をすることができた。

9月12日

希望製作所

訪問先都市	ソウル
面　会　者	ソーシャルデザイナー ソーシャルデザイナー
訪 問 概 要	希望製作所は、多様な社会のニーズや課題について市民が解決案を模索し、行政機関等に提案する施設である。行政機関に一任するのではなく、我々市民も積極的に行政に参加していくことで、よりよい社会を作ることができると改めて気付かされた。

移住背景青少年支援財団

訪問先都市	ソウル
面　会　者	所長 副所長
訪 問 概 要	移住背景青少年支援財団は、脱北や多文化家庭の青少年を支援するための非営利財団である。青少年たちとソーラン節を一緒に踊ることで、短い時間ではあったが、楽しく交流することができた。いろいろな背景を抱える青少年がいるということを知り、多文化共生を間近で感じることで、取組まなければいけない課題の多さをあらためて認識できた。

Nソウルタワー展望台

訪問先都市	ソウル
訪 問 概 要	Ｎソウルタワーは、放送電波の送受信と韓国の伝統美をいかした観光展望施設の機能を備えた国内最初の総合電波塔である。40年余りの間、韓国の代表的な観光地として、また、ソウルのシンボルとしての役割を果たしており、展望台からのソウル市内の光景は絶景であった。

9月13日

韓半島統一未来センター

訪問先都市	漣川
訪 問 概 要	韓半島統一未来センターは、統一部の統一体験研修施設として、若い世代の養成、南北交流協力の支援、平和統一意識拡散等を目的に設立された機関である。離散家族や南北統一に関する資料の閲覧や実際の北朝鮮の様子を見ることで南北統一の重要性について改めて意識させられた。

9月14日

韓国外国語大学 日本語大学

訪問先都市	ソウル
面　会　者	日本語大学日本言語文化学部教授 日本語大学日本言語文化学部助教授
訪 問 概 要	韓国外国語大学は、1954年に設立され、韓国語を始め世界主要45か国語を取り扱っている大学である。中でも日本語大学は、日韓国交正常化の前から設立されており、非常に長い歴史を持つものである。日本語大学の学生たちと教育やお互いの悩みについて共有することで、交流することができた。今後とも気軽に相談できる友人として交流を続けていきたい。

平澤市国際交流財団

訪問先都市	平澤
面　会　者	センター長 センター長代理
訪 問 概 要	平澤市国際交流財団は、2014年に設立された平澤市の国際交流と国際化を図る財団である。ホストファミリーを交えた歓迎式は、終始和やかなものであり、ホストファミリーの温かさ感じた時間であった。

9月16日

徳成女子大学

訪問先都市	ソウル
訪 問 概 要	徳成女子大学の学生と就職や日韓両国の関係について、ディスカッションや日本文化の紹介をすることでお互いの考え方や価値観に関する理解を深めることができた。日本に非常に興味のある学生が多く、より多くの人に日本のことを好きになってもらうために、私たち日本人も日本について勉強していく必要があると感じた。

9月17日

韓国両性平等教育振興院

訪問先都市	ソウル
訪 問 概 要	韓国両性平等教育振興院は、2003年に設立された女性家族部の一機関である。両性平等教育及び性認知教育を行い、振興させることで韓国社会内に存在する男女差別的な意識と慣行を改善するための社会基盤整備を目的としている。性差別による経済的損失や社会的損失の大きさを知ることで、改めて、男女平等社会の重要性について気付くことができた。

サムスンイノベーションミュージアム

訪問先都市	水原
訪 問 概 要	サムスンイノベーションミュージアムは、韓国最大の電子産業史博物館である。様々な電子機器を用いた最新技術の体験や、電子産業の歴史に関する貴重な展示物に、技術が日々進歩していることを感じた。すばらしい技術の発展に驚かされ、近い将来実現するであろう世界の姿を感じることができた。

水原伝統市場

訪問先都市	水原
訪 問 概 要	水原伝統市場は、韓国で唯一王が作った市場であり、一番の繁華街である八達門の隣には、栄洞市場が集まり、大きな市場区域を形成している。衣類や靴といった品物が低価格で販売されており、市場は大勢の人で大変な賑わいであった。はるか昔から水原の人々の生活に寄り添ってきた市場を見学し、悠久の歴史に思いを馳せた。

9月18日

ソウル文化ツアー

訪問先都市	ソウル
プログラム概要	日韓青少年交流会に参加した韓国青年の案内のもと、韓服体験や韓国の放送局であるMBC内にあるテーマパークを訪問した。久しぶりに会う韓国青年と共にいろいろな場所を巡ることで更なる交流をすることができた。帰国後もこの関係を続け、日韓交流の一翼を担っていきたい。

団　長　報　告

平成30年度　日本青年韓国派遣

青木　浩史

●はじめに

日本・韓国青年親善交流事業は、昭和59年の日韓両国首脳会談における共同声明の趣旨と、昭和60年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、昭和62年度から実施してきている。

両国は隣国同士であり長い歴史を有しているが、近年の両国関係をみると、訪日韓国人数は毎年大きく増加し続けているが、訪韓日本人数は前年比半減した年もあり、その理由として日韓間に存在する複数の懸案事項が影響を与えているといえる状況にある。

本年、平成30年の10月は、小渕内閣総理大臣と金大中大統領が未来のあるべき両国関係について宣言した「21世紀パートナーシップ共同宣言」からちょうど20周年の節目にあたる。日本大衆文化の解禁もこの宣言の行われた10年から段階的に実施されてきた（次政権で映画・音楽など全面解禁）ものである。現在、両国いずれにおいても関係の強化の必要性は強く認識しており、日韓外相会談や首脳会談の場で、困難な問題を適切にマネージメントしつつ、未来志向の関係を構築していくことを確認している。このような環境の下、本派遣団を率いて訪韓してきたところであるが、本事業は日本と韓国両国政府の共同事業として実施され、今回の派遣団で32回目。途中一度も途切れることなく継続されてきている事業であり、その存在意義、両国関係にもたらす成果は非常に大きなものがある。

●事前研修等

6月12日に団長・副団長・渉外会議があり、副団長の二名、渉外の一名と初めて顔を合わせた。三人はいずれも内閣府が行っている青少年国際交流事業の団員経験者。今回その役職に応募したのは、自分の経験を元に団員には視野を広げてもらい、次世代のリーダーとなる人材育成に貢献したいという大きな目標があるというものであり、団長として団を引率していく上で心強く感じられた。

そして、東京のオリンピック記念青少年総合センターで事前研修が7月3日から7日まで行われ、全国から集まった団員たちは初めて顔を合わせた。団員構成は25名中女性22名、男性3名。うち学生が20名。韓国渡航経験も豊富なものが多く、会話が自由にできるものも数名おり、渡航後の文化交流会の司会等場面でも大活躍していた。

全員が初対面ということで堅くぎこちなくもあり、初日は自己紹介や個人目標の発表などで団員同士お互いを知ることからはじまった。二日目にユースリーダー（YL）やアシスタントユースリーダー（AYL）を決める段になると、積極的に自薦する者も複数人出て、団員同士の多数決の下決定した。それ以後はYL、AYLが司会を担い議論を引っ張りつつ、事前研修ハンドブックで例示されている係分担、日本紹介計画案、ディスカッションテーマ案、そして団目標を決めていった。

団の目標設定の場面では互いが知恵を出し合い、最終的に「新友から心友へ」という案に団員の合意で決まった。その意味は、「新しい友人、仲間、一つ一つの出会いを大切にして歩み寄り、お互いを理解・尊重し心友へと成長する。両国の明るい未来を築くために、みんなと共に夢へのスタートを切る。」といったもので、団としてのこれからの行動に希望を抱かせるものとなった。

また、過去の派遣団の例にならい、ロゴマークも決めた。ハートは誰しも「愛」など暖かな印象をもち、派遣中出会う多くの人たちと「親友から心友」になれるよう「愛」を繋げていければというメッセージを込めた指ハートになった。

そのほか、この事前研修では、外務省職員からの韓国事情について講義を受け認識を深めたり、留学生とのディスカッションでは10名以上もの留学生が来てくれて、流ちょうな日本語で活発な意見交換を行ったりもした。この事前研修は内閣府国際交流事業についての理解を深めるほか、日本代表青年として自覚を持つ。準備

指ハートの団ロゴマーク

万端で訪問国活動に臨めるよう計画を立てる。訪問国と日本についての理解を深める。などねらいがあったが、団員は5日間寝食を共に過ごしたことにより、団の結束を固める。自立心とリーダーシップを養う。等については、緒についたものとなったとこの時点ではそう認識していたが、自主研修期間中に、事前研修中の白熱したやりとりはうわべだけのものであったということを思い知らされることになった。

●日韓青年親善交流のつどい

7月下旬から8月上旬にかけて、韓国青年招へいが行われたが、プログラム中の７月27～29日の3日間、埼玉県越谷市の研修施設で「日韓青年親善交流のつどい」が行われた。

つどいの目的は、韓国の青年と日本青年が一堂に会し寝食を共にすることにより、相手国に対する相互理解、異文化理解の促進を図り、国際交流活動における感覚を向上させるもので、本年度の派遣団からのつどい参加希望者は4人であったが、ともに参加させていただいた。

参加青年たちは最初に行ったアイスブレイクでお互いうちとけ、その後、文化交流、ディスカッション、運動会等活発に交流活動を行い、参加していた同世代の日本青年、既参加青年、韓国の青年たちからこれらの交流活動で多くのことを吸収することができ、訪問前の貴重な経験になったと思われる。

なお、私にとっては、このつどいの期間中、韓国青年招へい団のチョ・ユンイェ団長らと話す機会も多くあった。自身韓国訪問は初めてということもあり、事前に友好関係を築いておくことができたのは大きかったし本当に助かった。

当方が訪問した際に女性家族部表敬訪問、また韓国側主催による交流会、歓送夕食会があり、いずれの場でもチョ・ユンイェ団長らに出迎えていただき、いろいろお世話になった。次年度以降も韓国青年招へいのほうが日本青年派遣より早く行われる場合、団長等はぜひともこの日韓青年親善交流のつどいに参加し、招へい団の団長らと事前に関係を深めておいていただきたい。

●出発前研修までの期間

事前研修後、出発前研修までの期間、団員たちはそれぞれ地元に戻り自主研修期間となった。この期間は、お互い顔を合わす機会は無いけれども、事前研修中に決着していない事項の決定、担当係の業務の準備、ディスカッションテーマの掘り下げ、日本文化紹介の実施に向けた用具の揃えや練習を行わなければならないなど、派遣前に済ませておかなければならないことに対応する期間であり、SNS等を駆使し相互に密接に連絡を取り合いながら切磋琢磨して実現していかなければならないことが山ほどある盛り沢山の期間でもある。

しかし事前研修後、派遣団員同士の連絡ツールとして活用を決めていたLINEでのやりとりを注視していたが、団ポロシャツのデザインや名刺など事前研修の時にきちんと方向性まで決めたこと以外は、団員同士が連絡を密に準備を進めている動きが全く見えてこなかった。団員個々の担当は決まっていても誰が中心となって動くのかが明確になっておらず、結局模様眺めで時間を浪費している状態が続き、この状態で訪問国活動をきちんこなしていけるのか大きな不安要素となった。このことは団員経験のある副団長、渉外担当とも自分たちが団員の時と比べてもあまりに動きが見られないと危機感を抱き、残念ながら責務を超えることになったが、お盆前には団員に対し積極的に働きかけを行った。派遣まで二週間足らずとなった8月中頃、ようやく危機感が団員たちにも伝わった模様で、急にバタバタとあちこちの担当が動き始め、出発前研修ぎりぎりに駆け込みで準備が間にあったというような状況であった。

事前研修の時は初対面ながらお互いうまくやっているように見えても、やはり会って間もないということもあり結局うわべだけで、本音でつきあいができていないということがこの自主研修期間中の場面で出てしまったということになってしまった。しかしながら、事前準備さえきちんとできていたら、派遣の本番になっても動じることはなく、九分九厘成功したものといっても過言ではないので、この時点での苦労は、終わってみればよかったのではないだろうか。

出発前研修中の壮行会の中で成果発表の時間もあり、日本文化紹介の一部を初めて披露したが、想定外に完成度は高く、同席していた者からも多数の拍手をいただいた。これなら実際に行う日本文化紹介の場でも何とかなる、大丈夫であろうと一安心したところである。

●韓国到着

いよいよ出国となり、羽田空港で内閣府や青少年交流センター職員の盛大な見送りを受け出国、そして2時間半後に韓国の金浦空港に到着した。金浦空港では、コーディネーター1名と通訳2名が盛大に出迎えてくれたが、通訳のうち一人は韓国青年招へいの団長通訳を務めていたナ・ソングヮン氏で、既に日韓青年親善交流のつどいで顔を見知っていた間柄であった。韓国滞在中の15日間、コーディネーター、通訳は常に行動を共にされるということで心強い味方となり、現に在韓中にはいろいろ相談に乗っていただき、また、助けてもいただいた。

●施設訪問

二日目から施設訪問が始まった。最初に韓国の政府機関であり、二国間の国際交流事業を担当している女性家

族部を表敬訪問。チェ・ウンジュ課長から女性家族部が所管する事項について一通りの説明を受けた。女性の権利保護や社会進出、国籍の異なる家族が同居しているなどの多文化家族への対応、青少年施設の運営や青少年の福祉施策など多様な施策を推進しており、今回の訪韓のテーマである「多文化共生」では、今後訪問予定に組み込まれている施設の多くは女性家族部が所管している施設であり、これらの施設を訪問し体験すれば、今説明したこと以上のことがわかるという話を伺った。

その後の質疑応答では、団員から予定時間を超過するほどの活発な質問があり、その後昼食をともにし、さらに一層掘り下げた話を伺うことができた。

団員は気後れすること無く積極的に質問を行い、今後の訪問を考えると頼もしくさえ感じられた。この時の説明で伺ったり、質問で回答いただいた内容は、以後の施設訪問の場の事前知識として本当に役立つものとなった。派遣事業の場合、最初に政府機関等への表敬訪問が予定されていることが多いが、その時の内容が以後の視察や活動に大きな影響を与えることも少なくないので、説明を受け理解できない点があったりした場合には、その場で疑問を解消しておくことが望まれる。次回以降もこの表敬訪問の場を有効に活用していただきたい。

韓国の多文化共生の問題は、東南アジアから結婚移民女性と国際結婚家庭の子供が急増し、家族内において多文化共生の対応が必要不可欠となったこと。その支援のために韓国政府が対応している言語数は13カ国語にも及ぶと伺い、この分野の施策は日本よりも充実していると感じた部分でもあった。

表敬訪問で知識を身につけ、女性家族部の関係施設として訪問先に組み込まれていた青少年活動振興センター、青少年修練院、障害者総合福祉機関、移住背景青少年支援財団、韓国両性平等教育振興院など各施設を訪問、韓国の多文化共生施策について身をもって体験させていただき、日本のことわざにある、「百聞は一見にしかず」で、女性家族部のチェ・ウンジュ課長の言われたとおり、説明を受けたこと以上のことを実際に学ばせてもらった。団員も施設訪問でいろいろ気づかされるものがあったものと確信している。

また、見学先の中では韓半島統一未来センター、烏頭山統一展望台が興味を引いた。当日は快晴に恵まれ、烏頭山統一展望台からは大河を挟んで北朝鮮領内を手に取るように見ることができた。対岸まで最短距離わずか450メートル。団員たちも北朝鮮領内を直接目にし、建築物の様子や確認できた人数を教えあったり、展示物として置かれている北朝鮮の物品や南北に分かれ生き別れとなった親兄弟の写真を直に見て、分断された国家というものが残酷でどういう状況にあるのかということを身をもって感じ取っていた。

そのほか、韓国外国語大学、徳成女子大学の学生とも交流活動を行った。団員たちは相手側も同世代ということもあり、限られた時間ではあったが話が弾んで楽しんでいた模様であった。

なお、5カ所の訪問施設先で日本文化紹介を行った。例年と比較し回数が多かったようで、準備や持参する必要な資材も多く大変であったが、日本文化紹介後はいずれも大勢の方々から盛大な拍手を頂戴した。苦労が報われ日本文化を披露してよかったという思いとともに、日本文化紹介は、訪問国プログラム上必須な事項で外すことのできないものであるということを強く感じた。

女性家族部の取組みについて説明を伺う（女性家族部）

チェ・ウンジュ青少年活動振興課長と記念品交換をする

●日韓青少年交流会

団員たちが訪問国の日程の中で最も楽しみにしていたのは、この日韓青少年交流会。今年は残念ながら日程の都合上例年より1泊少ない1泊2日の日程となってしまったが、初日は24時までという密度の濃いプログラムを団員たちは最後まで元気に楽しんで過ごした。

韓国側の実行委員が綿密に企画した内容に沿ってプ

日韓青少年交流会での日本文化紹介

ログラムは実施された。最初はお互いが打ち解け親しくなるためのレクリエーションからはじまったが、お互いが同年代の青年ということもあり、気心が知れわたるのは早いようで、あっという間に打ち解け、あちらこちらから歓声が上がっていた。舞台を使用して行った交流会の中心となる「文化交流の夕べ」では、日韓の青年がお互い事前に練習を積んできたそれぞれの国の文化を披露し、盛大な拍手を受けていた。最後は輪になって歌い、集合写真もあちらこちらでたくさんとっていた。その後は軽食をつまみながら会話中心の交流会を24時まで実施。宿泊についても日韓の参加者がグループ毎に一緒になって同一の部屋で過ごした。きっと布団の中でも会話が盛り上がっていたことであろうと思われる。

翌日朝からのディスカッションのテーマは多文化共生というテーマの中で5テーマに分かれて、各自自分の意見を発表し方向性を取りまとめた上で発表を行った。

交流会の最後には両国の青年たちによるプレゼントの交換が行われ、大きな歓声が上がった。交流会の予定時間が終了しても青年たちはなかなか分かれることができず、当日の宿泊先のホテルに向かうバスへの乗車も困難な状況で、バスの発車が遅れるほどであった。今回の1泊2日の日程では大変慌ただしく感じられたし、24時までという非常識な時間まで公式プログラムの中で団員を拘束することになったので、次年度以降は例年の日程である2泊3日の期間に戻していただければありがたいと思う。

●日韓交流おまつりの視察

最大の草の根交流事業である「日韓交流おまつり2018 in Seoul」がCOEXという国際展示場でちょうど訪韓中の9日に開催されており、我々も半日ではあるが見学させていただいた。1日限りではあるが6万人もの人々が来場するという大盛況な場面を直接目にし、韓国の方々の日本に対する関心の高さを直接見てとれたところである。

このおまつりは、思っていたよりはるかに盛大なイベントであり、大勢の人々で広大な会場内は大変混雑していた。日本側から出店した自治体や企業のブースにも大勢の人々が訪れ楽しんでいた。

偶然にもスケジュールが合致したため見学させていただいたが、韓国の方々の日本に対する関心の高さを大いに痛感した次第である。

●ホームステイ

初めて平澤市で日本派遣団のホームステイの受け入れが行われた。前日夜に一家族の受け入れが不可能となり先行きが心配されたところであるが、盛大な歓迎を受けた後、団員たちは受け入れの各家庭に分散していった。二日後ホームステイが終わり再会したが、いずれの家庭においても心のこもったおもてなしを受け、団員たちは出発の時間になっても、別れを惜しんでいた。自身も初めてホームステイに参加、韓国の普通の家庭の週末の過ごし方そのものを体験させていただき、ご自宅の様子や韓国の方が情に厚いということがよくわかった。このような体験は個人旅行ではありえないので、貴重な経験をさせていただく結果となり本当にありがたかったし、派遣事業の中では必須事項といえるほどの無くてはならないメインプログラムであるということを強く感じた。

●最後に

団長としての使命として、団員は後にも先にもない1度限りの団員身分での本交流事業への参加であることから、団員には全行程経験させたい、スケジュールに穴を開けることはせず、予定されている全ての行動を実現させたいと思い、団員にとってはありがた迷惑かもしれないが、最低限の規律は設けさせていただいた。団員も団体行動であるということを自覚し大きく羽目を外すようなことは無かった。団員の日頃の行いもよかったおかげか、幸いにも行動時間中に雨に降られることは一切無く、15日間の全日程を団員全員が全うすることができた。

韓国内だけで15日間という長い行程なので、団員はいくら若いとはいえ疲労が蓄積されてしまうことは避けられない。日程中わずか半日だけでもいいから宿泊ホテルでの休息日があってもいいのではないだろうか。一番遅い時間までプログラムが詰まっている日は、午前中から始まり24時終了というものまであった。やはりといっていいのか、帰国後は緊張感がとけてしまったのか帰国後研修期間中に体調を崩して病院にかかることになった団員等が複数でてしまったことは残念でならない。

冒頭でも記したとおり、二国間には懸案事項もあるけれども、韓国内において、いずれの訪問先においても熱

烈な歓迎を受けたのは事実。交流を行った日韓双方の青年たちがこれからも継続して交流を深めていただき、未来志向の日韓関係を築いていっていただきたいと切に願っている。

　このためにも、団員は今回、日ごろの個人旅行では経験できない政府機関等を訪問し、また韓国青年と交流して理解を深めてきたという貴重な体験を生かし、今後においても、お互いの国の文化を尊重しつつ、今回深めた友情を元に、日韓友好増進の主役となって活動していただきたい。また、より一層知見を広めるため、今回訪問した韓国以外の各国に対しても機会があれば積極的に訪れていただき、将来は各分野においてリーダーとなって活躍されることを期待している。

　なお、事前研修、帰国後研修まで含めればほぼ一ヶ月近く寝食を共にした25人の仲間たち。「新友から心友へ」という目標は、日本の参加青年同士にも当然当てはまることなので、今後の事後活動等もきっかけに関係を続けていってほしい。

　最後に、多々ご尽力いただいた内閣府、青少年国際交流推進センター、IYEOのほか本年の韓国派遣団に関わりを持っていただいた皆様全員に感謝申し上げるとともに、25人の団員たちの今後のますますの活躍を祈念し、団長報告といたします。

参加青年代表報告
平成30年度　日本青年韓国派遣

顔を見て話すことの大切さ

派遣に至るまで

私には、在日韓国人の友人がいて、その子を通して韓国のことをたくさん教えてもらった。その頃は、韓国の料理や音楽に興味がある程度で国際交流をしようという考えはなかった。しかし、社会に出て働くようになり、外国人と接する機会が増えた今、国際交流に興味を持つようになった。現在、病院で勤務しており、外国人の患者は増加傾向である。特にアジア人の患者は多く、韓国人と触れ合う機会も多い。しかし、韓国の文化をよく知らないため対応に困ることが多かった。韓国人と接する機会が増えればと思い、現在、ボランティアスタッフとして大阪の語学カフェで活動を行っている。そこで今回の事業を教えてもらい応募に至った。

日本人青年

日本青年は18歳〜30歳まで幅広い年齢のメンバーが集まった。韓国人の友人がいて韓国に詳しい人から、今まで韓国に行ったことがない人まで、多種多様であった。年齢の幅が広いため、団としてまとまるのか不安であったが、全員で案を出し合って協力しながら派遣を終えることができた。時には、自分の想像もしない発想を知ることができ、考えの幅が広がったように感じている。皆からの意見を通して自分の長所また短所を見つめ直した期間でもあった。事前・帰国後研修を含め19日間、誰一人、体調不良にならずに帰国できたことは今でも誇りであり、体温管理や睡眠をしっかり取るなど、互いに気遣い合い、体調管理は特に抜かりなく行えたと思っている。決して楽しいことばかりではなかったが、その度にどうすれば良いかと対策を考え、今ではどれも良い経験であったといえる。集団でこのように長い期間、生活を共にできる環境は今後恐らくないだろう。今回、派遣を共にした仲間はかけがえのない存在である。

韓国青年

派遣前、韓国青年が日本に対してどう思っているのか不安な面もあった。プログラムの中で多くの韓国青年と話す機会があったが、どこへ訪れても笑顔で温かく迎えてくれた。日本に訪れたことのある韓国青年が多く、私が学生時代に見ていたアニメなどもよく知っていて、まるで日本の友人と話をしているような感覚であった。特に韓国派遣団との文化交流の夜が印象に残っている。日本紹介として、ソーラン節や書道などを準備し、その日が初披露する場であった。広い会場を目の前にして緊張していたが、公演中、韓国派遣団の皆さんが一緒に踊ってくれて、ペンライトの代わりにスマートフォンのライトを照らし、左右に振って応援してくれていた。その光景を見て、感動してしまい思わず泣いてしまった。韓国派遣団の皆さんの心遣いを感じ、今でもあの時の感動は忘れられない。

韓国外国語大学校　日本語大学を訪れて

ソウルにある韓国外国語大学校　日本語大学へ訪れる機会があった。韓国で初めて「日本語学科」ではなく、日本研究専門の単科大学である「日本語大学」へ昇格した大学だ。韓日交流正常化より前の1961年に日本語学科が設立されたという話を聞いて、その頃から日本に対しての興味があったことに対して驚いた。一時間程度の講義を受け、印象に残っているのは、「近年、外国人が日本について学び、日本のことを教えている。それに違和感があるかもしれないが、外国人からの視点で、日本のことを学ぶと、当たり前過ぎて気づいていなかった日本の魅力に気づくことができます。」とおっしゃっていたことだ。確かに、テレビで日本のことについて深く語る外国人の姿を見て違和感を覚えたことがあった。しかし、この言葉を聞いて思わず納得してしまった。今回のプログラムを通して、日本では同様の取り組みをしているのか、日本ではどうしているのだろう、と思う場面が多かった。韓国のことについてだけではなく、母国である日本についても詳しく知ろうと思える機会となった。

ホームステイ

普段の韓国の生活を知りたいと思っていた私にとって、一番楽しみにしていたプログラムであった。人生初めてのホームステイとなったが、ホストファミリーも私たちが初めてのホームステイの受け入れであった。父・母・長女・次女・犬2匹の家庭で、長女は日本語が堪能であった。その理由を聞くと、祖母が日本人であり、孫

に日本語を教えたいと思っていたが、長女が生まれる前に亡くなってしまった。祖母の思いを知った長女が、自ら日本語を勉強したいと、韓国に住む日本人に家庭教師になってもらい勉強しているとのことであった。今回のホームステイの受け入れも、実際に日本人と接する貴重な機会だからと申し込んだそうだ。時折、考えながらも日本語を一生懸命使って話してくれる長女の姿が健気で、日本に興味を持ってくれていることがとても嬉しかった。食事も韓国の伝統を知ってほしいと、参鶏湯やチッコル（フライドチキンとコーラのセットで韓国の定番の食べ方である）などたくさんのお店に連れていってくれた。父の友人が経営する焼肉屋さんに連れていってくれ、そこでも食べきれない位の食事を出してくれた。夜は「ユンノリ」という韓国の伝統的な遊びを教えてもらいながら一緒に遊んだ。お土産を買うためにショッピングモールに連れて行ってくれた時、私たちは内緒でメッセージカードを購入し、日本語と慣れない韓国語で家族に向け手紙を書いてホームステイの最終日に渡した。泣きながら受け取ってくれた姿を今でも鮮明に覚えている。本当は、韓服を体験してほしかったが時間がなくてできなかったこと、マンションの近くの綺麗な湖の風景を見せてあげたかったが雨で行けなかったことなどを別れる前に伝えられ、私たちのことを思ってくれていたことを知り涙してしまった。「今回が初めてのホームステイだったけど、あなたたちが最初で最後の受け入れになるかもしれない。それくらい離れたくない。またいつでも遊びに来てね。」と言ってくれた。帰国した今も連絡を取り続けている。今後もこの縁を大事に長く継続していきたいと思っている。

多文化共生への取組み

今回、多文化共生がテーマであり、韓国ではどう取組んでいるのか学ぶ機会が多かった。近年、韓国でも国際結婚の割合が増加している。特にベトナム人、フィリピン人などの東南アジアの女性が結婚を機に韓国に来るケースが多いとのことであった。江陵市健康家庭多文化家族支援センターでは、外国人の妻や夫に対して、韓国の正月などの行事や風習、韓国料理を一緒に作るなど、韓国に早く馴染めるように様々なプログラムが実施されている。将来の人材育成のために、国際結婚をして生まれた子に対し、父と母から母国語を子に習わせ、将来的に二つの言語が使えるように取り組みを行っていた。また、希望製作所という市民社会参加民間機構にも訪問した。健常者・障害者の垣根を超え、また国籍関係なく市民の要望を聞き取り、市民と共に解決を目指すという活動内容を聞き、非営利のシンクタンクがほとんどない日本は、学ぶところが多いと感じた。

今回の派遣を通して感じたこと

私が持っていた韓国のイメージは、ニュースやSNS等から構築されていたものだと今回の派遣を通して実感した。南北分断から約70年あまり経過し、全世界でも唯一の分断国家である。100年を迎える前に統一したいと韓半島統一未来センターの方がおっしゃっていたことが印象に残っており、南北統一に向けての強い気持ちを知った。韓国政府が行っている事業について知り、様々な施設に訪問し、メディアでは伝えられていない韓国を知ることができた。韓国といえば、食べ物が美味しい、美容大国であるといった印象であったが、現在ではその印象はより深みのあるものへと変わった。

出国前の事前研修時にて、日本の大学に通う韓国留学生との交流の時間があった。その時に少し歴史の話になったことがあるが、「昔のことに関して、あなたたちを責めるつもりはない。私たちが変えられるものでもないし、それは国同士がすることだと思う。両国の関係は私たちなりに作ればいい。」と言ってくれたことを覚えている。そのような考えも、顔を見て話すからこそ知ることができる。日本では、外国人と接することが怖いと感じている人が多いと思うが、それはコミュニケーションが上手くとれるのか不安で一歩引いてしまうことがひとつの理由だろう。しかし、顔を合わせて直接話し、お互いの文化や想いを知ることで、理解をすることができる。その過程が多文化共生には重要なことだと学んだ。帰国後、早速、普段ボランティアスタッフとして活動しているカフェで、帰国後発表会をさせていただいた。日本で働く韓国人も参加していただき、「韓国人でもなかなか行けない場所に行って多くのことを学んだんですね。この事業は素晴らしいと思います。」と言ってもらえた。もっと多くの人々に韓国のこと、国際交流の楽しさを伝えていき、日韓の架け橋になるだけでなく、多文化共生の考えを広めていきたいと考えている。

ホームステイ先の家族と一緒に

韓国派遣で学んだこと

参加しようと思ったきっかけ

テレビや新聞では韓国での反日活動や日本での嫌韓スピーチの話題が取り上げられることがある。政治的な対立も見られ、子供の頃から「日本と韓国はあまり仲の良くない国なのだ」と感じることが多かった。私は幼少期に数年、韓国で過ごした経験があるのだが、韓国人の人懐っこい性格に触れたり日本とはタイプの違う美味しい料理を食べたりするうちに韓国に興味を持つようになり、大学では韓国語や朝鮮史を学ぶようになった。韓国人留学生とも仲良くなり話せば話すほど彼らの良さを知ると同時に、「マスメディアで映し出される日韓関係や韓国人ではなく、自分の目で、耳で、韓国のことをもっと知りたい」と思い、本事業への応募を決めた。どうして日本と韓国はしばしばいがみ合うのか。日本と韓国は将来どのような関係を築くことができるのだろうか。親やマスコミや学校で見聞きした偏見を取り払って、韓国人青年と虚心坦懐に話し合うことができればそういった疑問への答えも見つかるのではないかという希望も抱いていた。

事前研修～自主研修

参加青年として韓国派遣が決まって以降、貴重な機会を最大限に活かすためにいくつか準備をした。まずは韓国語と韓国の勉強である。韓国語を話せたほうが韓国人青年との話し合いが円滑に進むであろうし、バックグラウンドの違う彼らと話すためには韓国の社会や政治や文化を知っておくことが重要だと思ったからである。そこで、課題図書に加え、ハングル検定の対策や韓国社会の勉強を個人的に進めた。そして、せっかく韓国に行くからには日本の良さを伝えたいと考え、日本の勉強と日本文化の紹介の準備に力を入れた。私は現地で日本の文化を紹介する日本紹介係だったので、ソーラン節の振り付けの意味を調べたり、東京近辺に住む人で集まってソーラン節や歌を練習する機会を準備したりした。

さらに、埼玉県での二泊三日の日韓青年親善交流のつどいに参加した。最初は緊張してなかなか話すことができなったが、アイスブレイクや文化交流を経て次第に打ち解けていった。個人的に練習して持って行ったけん玉に興味や関心を持ってくれる韓国青年が多くいて、けん玉のやり方やコツを教えるうちに、日本文化やその良さを伝える責任のようなものを感じたりもした。寝食を共にして共同生活を送る中で、本音で語り合う経験を得た。なぜ反日の人が多いのかということや、慰安婦問題といった難しい問題について尋ねても嫌な顔をせずに真摯に向き合って考えて答えてくれたし、向こうからも日本について気になっていることをたくさん質問してくれた。お互い遠慮して無難に過ごすことは簡単だけれども、両国が未来発展的な友好関係を築こうと思えば、その過程でお互いを理解することが不可欠であるし、そのためにはたくさん語ることが大切なのだと実感した。その他にも、ふとした瞬間に韓国青年が話しかけてきてくれたり韓国の話を聞かせてくれたりして、韓国青年のやさしさや温かさに触れることができ、9月からの韓国派遣が待ち遠しくなった。

日韓青少年交流会

文化交流会では韓国青年がK-popのダンスやテコンドーや歌を披露し、日本青年は有志ダンスや歌、ソーラン節、書道パフォーマンスを披露した。互いの文化を紹介しあうことで違いに気づき自国の文化の良さを感じることができた。また、韓国で文化を披露するために団員が結束して力を合わせて準備してきたものが韓国青年に評価してもらえたことは自信にもつながったし日本人としての誇りを感じる瞬間でもあった。

夜食交流会および部屋での交流では、韓国青年と胸襟を開いて語り合う良い機会となった。堅い話ばかりではなく、趣味や好み、恋愛の話などをすることを通じて韓国青年がより身近に感じられ、時にはちょっとした違いに驚いたり、似た考え方に共感したりとこういった交流から親睦が生まれるのだと感じた。

討論会では教育についてディスカッションをした。英語教育や奨学金など複数の観点から日韓の教育問題を話し合う中で、日韓が共通して抱える問題があることを知りそれぞれの国の立場から解決策を考え合うことは貴重な体験となった。日本にあって韓国にはない視点、韓国にあって日本にはない視点。これらは自国にとどまっているだけではわからず、こうして直接話し合って初めて見えてくるものだと思った。

韓半島統一未来センターでは、韓国と北朝鮮の青少年が交流を行い統一に対して前向きな考え方を持つために活動している施設があることを初めて知った。休戦状態にあり、しばしば緊迫状態が報じられる韓国と北朝鮮が統一した場合の具体的なシチュエーションを知ることができて、これまでイメージさえできなかった韓半島の統一に希望を見出すことができた。

ホームステイ

15日間の韓国派遣のうち最も強く印象に残ったのがホームステイであった。両親のほかに高校生と大学生の息子が一人ずついる4人構成の家族で、高校生の次男を除き日本語が通じなかったため英語でコミュニケーションを図ることも多かったのだが、そんな私たちに対して会ったばっかりにも関わらず親切にしてくださったのは衝撃的であった。チキンを食べたいと言えばチキンを食べさせてくれ、チムジルバンを体験してみたいと言えば連れて行ってくれ、至れり尽くせりの三日間となった。特に印象に残っているのが二日目の水原華城見学である。世界遺産をツアーし、気になることを質問すれば納得のいくまで丁寧に答えてくださり、韓国の歴史や文化に興味が湧き、もっと韓国のことを知りたいと思うようになった。別れる前夜には大学生の長男が家の周りの散歩に連れて行ってくれて、韓国のネットカフェやカラオケの仕組みを説明してくれたのだが、そんな非日常がとても刺激的だった。

最後に

今回のプログラムでは貴重な経験をすることができ、一回り自分が成長したのを感じる。帰国してから日韓関連のニュースを見ると感情論に流されない解決策は何だろうと考えてみたり、国内のニュースでも近視眼的な視点からだけではなく他国との比較や国際的な観点から考えてみようしたりすることが増えた。これまで経験してきた韓国青年との交流は、自分が従来韓国に対して抱いていた固定観念に新しい風を吹き込むものであったし、もっと韓国のことを知りたいと知識欲・好奇心を刺激するものであった。

プログラムで得た経験を社会に還元するために大切なのが事後活動だと思う。私は平素より活動している大学の異文化交流センターにて、たくさんの外国人や留学生と活発な交流を通じて日本の良さを発信していきたいと思う。日本の魅力を伝えて日本を好きになってもらうと同時に、彼らからも彼らの地域・国の文化や考え方を学ぶことでさらに国際的な視野を広げたい。韓国青年との虚心坦懐な話し合いを経て友情を築けた経験を、「人は国籍や言語や文化を超えて分かり合える」という信念に昇華させ、大学中に国際交流の輪を広げることが私の今の目標である。

最後になったが、団員の皆がいたからこそ楽しい日々を送ることができたし、皆の団結なしには素敵な文化発表を成し遂げることは不可能であった。時には足並みが揃わぬ困難な状況にも直面したが、今となってはそれもいい思い出である。何年後になるかはわからないけれども、皆が各々の夢に向かって突き進み、成長した姿で再会できることを期待している。そして、青木団長、めぐさん、かよさん、きゃみーさん。団と団員のことをいつも一番に考えてくださったことに感謝してもしきれない。素敵な時間、大切な仲間。感謝の思いでいっぱいである。それではまた、会える日まで。

韓国派遣を通して

今回この事業に参加しようと思ったのは、日本の伝統や歴史を通し、日本の良さや魅力を伝える体験をしたい。また今回出会う韓国人のみならず、日本人とも絆や友情を深めたいと思ったからだ。

私は韓国の歴史、日韓問題について一番興味・関心を持っている。私は韓国に1年留学をしたが、韓国人に日韓問題について話を聞こうとすると毎回雰囲気が悪くなってしまい、最後まで話し合うことができなかった。よって今回の事業で韓国青年が日本のことについてどう思っているのか、また私たちが日韓友好のために今なにができるのかなどを話し合うきっかけになると強く思った。

私は今回の事業を通して学んだことが三つある。

一つ目は、日本の問題についてもっと詳しく知らなければならないということだ。私は漣川の韓半島統一未来センターに訪問したことが、一番印象深い体験であった。私の中で北朝鮮という国は本当に存在しているのか、ニュースで流れている北朝鮮という国は本物なのかという気持ちがどこかにあった。そのため今回烏頭山展望台から北朝鮮を覗いた時、人が見えたということでさえもすごく興奮したのを覚えている。また離散家族の再会を再現した模型を見たときは、とても胸が痛くなった。60年ぶりに再会を果たしたのにも拘わらず、数時間だけを共に過ごしまた別れてしまう。いつ再び会えるかどうかも分からないのに、２回目の別れはどれほど悲しいものだろうかと思った。そして、韓半島統一未来センターではもし南北が統一されたら、資源、物流、観光、文化、生態系の５つに分類し、どんな風に国が変化していくのか、どういった部分が良くなるのかなどについて実際に体験を通して学べたことで、より南北統一が実現性あるものだと感じることができた。また南北の統一が実現すれば朝鮮戦争の冷戦も終わり、世界平和にもつながるというお話を聞いた。私ももちろん世界平和を望んでいる。しかし、南北が統一したからといって本当に平和な世の中が来るのだろうか。戦争がこの世から無くなれば、本当にそれは平和と言えるのだろうかと考えた。戦争がなくても、日本は世界でも自殺率が多い国のひとつだ。更には、若者の死因の第1位は自殺と言えるほどだ。これは日本内で戦争をしているのと同じではないのかと私は思った。そのため今回事業に参加したことで、南北統一、日韓友好を願い行動するということももちろん大事だが、それ以前にまず日本人として日本の現状はどうなのか、日本という国はどんな問題を抱えているのかなどの興味をもっと強く持たなければならないと感じた。さらに、日韓青少年交流会のディスカッションでは、事前学習として調べていったことは理解をしていたが、韓国青年側から急な質問を受けた際自分自身が日本の政策や、現状についてもまだまだ知らないことがあるということを思い知らされた。自主研修期間の間に調べたつもりではあったが、まだまだ知らないことが多いと実感したため、その知らなかった部分を調べ、今回学んだ韓国との違いにも目を向けながら理解を深める時間をつくっていきたい。

二つ目は男女平等社会についてだ。韓国両性平等教育振興院でお話を聞かせていただき、色や外見などから私は、無意識に固定概念や偏見を持っていたということに気付いた。また私も幼い頃女の子らしくしなさいと言われたことがあったことを思い出し、それすらも偏見になるということを改めて実感した。固定概念を崩すということは時間がかかり、必ずしも崩すことができるとは限らない。また、固定概念が崩れたからといって良い方向に行くとも限らない。しかし、両性平等社会を作り上げていくためには一人ひとりの意識から変えていく必要がある。私は世の中、社会という目にとらわれずこれからの人生を「私らしく」生きていこうと思う。

三つ目は感謝をすることについてだ。韓国に滞在していた15日間、また事前研修、出発前研修、帰国後研修と本当に多くの方々が私たちのために動いてくださり、支えてくださった。私は派遣中、自分のことで精一杯になっていたが日本に帰国し、改めて考えてみた。コーディネーターさんは毎回訪問先と電話をとり連携してくださり、渉外の方々は分からない単語があれば事前に調べ、私たちに分かりやすく説明してくださった。また団長は夜遅くまで挨拶の練習や、私たちの外出のためにロビーで待機してくださった。また団長として私たちをいつも見守ってくださり、時には厳しく団をまとめてくださった。副団長は団員の悩みを親身になって聞いてくださり、アドバイスやお褒めの言葉もたくさんかけてくださった。他にも私たちの見えないところで、多くの方が私たちのために動いていた。また、団員の中でもみんなが自分の役割を持って行動してくれていた。これからも私の人生において、私からも見えていない所で誰かが私のために動いてくれているということを忘れず、感謝の気持ちを常に忘れないようにしたい。

今回事業に参加したことで私は話したことがない子に積極的に声をかけ、誰か困っていないか、私たち派遣団

以外の方にも迷惑になってないかなど常に視野を広くもち、自分にも周りにも注意を向けることができた。そして今までは思いついたことはすぐに動き始め、後先を考えずに行動することが多かったが、今回の事業では団体で行動しみんなに迷惑をかけるということでしっかりと自分の中で考えてから、自主的に責任感を持って行動に移すことができた。また今までは他人の迷惑になってしまうのではないかと心配し、悩んでもできるだけ自分の中で解決しようとしてきたが、報連相をしっかりしようと心がけたことで悩みすぎず、団員のアドバイスに耳を傾け解決することができた。これらの点において私自身は成長できたと感じる。

団員と将来の夢を語り合ったり、悩みを打ち明けたりしたことで、私たちのスローガンであった「新友から心友へ」という心友になれたのではないかと思う。また韓国派遣期間中にたくさんの韓国の友人ができたことで、韓国人はきっとこう考えているだろうという私の中にあった偏見が、いい意味で崩された。更には日本についてどう思っているのか、日韓問題についてなどの今まですることのできなかった深い話まですることができた。そして私は何よりも、この短期間でそこまでの関係になれたということが一番嬉しかった。今回の派遣で出会った韓国の友人とこれから先も連絡を取り合い、仲良くしていくことこそが私は日韓友好関係のための第一歩だと考える。

私は、今回参加させていただいた事業をもっと多くの方に知ってほしいと思った。私の大学には韓国語専攻があり、韓国に関心の高い人が多いので、事後活動としてこの事業の良さや、今回得た経験をできるだけ多くの人に伝えていきたい。

また、今回の派遣で出会った渉外の方に「あなたの大切な意見を伝えることができて、嬉しかった。」と言われた際、私もとても嬉しい気持ちになったと同時に、私も将来そんな素敵な言葉をかけられるような人になりたいと思った。そのためには今多くの経験をすることが大切だと考えたため、日韓関係のボランティア、スピーチ大会、作文大会などの参加、またより韓国語の勉強を一生懸命行い、通訳・翻訳など私の韓国語能力を活かしたことも積極的に参加していきたい。更には韓国に興味がある人もない人も参加できるような日韓交流会などを企画し、より多くの人に韓国の方と接してもらえるような場を作っていきたい。

最後に今回事業に携わっていただいた方々、そして出会ってくれた日本・韓国の友人達に感謝したい。

私たちに今できること～韓国派遣を通して～

私がそもそもこの派遣事業に参加しようと思ったきっかけは二つある。

まず一つ目は、純粋に韓国について知りたいと思ったからだ。なぜ韓国に興味を持ったかというと、そのきっかけは中学生の時に知った韓国の音楽だった。そこから次第に音楽だけでなく、韓国の文化や歴史、教育などにも興味を持つようになった。そして大学へ入学し、外国語の授業で韓国語を勉強したり、語学研修へ行ったり、韓国に興味・関心のある友人や韓国からの留学生との交流などを通して、韓国という国をさらに深く知りたいと思うようになった。

二つ目は日韓関係の発展だ。学生生活において、日本人と韓国人の学生同士が良好な関係を築けているのにもかかわらず、国家のような大きな枠組みになると関係があまり良好ではないのは何故だろうと思っていた。もちろん、日本に留学に来ている学生は少なくとも日本に興味があり、日本に対して良い印象を持った人が多いということ、そして韓国人留学生と交流する日本人学生は韓国に興味のある人が多いため、学生同士では友好関係が築けているのだろう。そこで、既存の友好の輪を互いの国に興味のない人をも巻き込んで大きくしていくことで、よりよい日韓関係を構築できるのではないだろうかと考えた。私はそのヒントをこの派遣で探したいと思った。

今回の派遣では、普通の旅行ではなかなか訪れることのできない場所へ行くことができ、非常に貴重な体験ができた。まず、女性家族部では、女性家族部の概要や韓国の政策について直接説明していただいた。日本と韓国は近い国であるが、政策が日本と異なっている部分が多いと感じた。こういった政策一つとっても、国としての考え方の違いが表れていてとても興味深いなと思った。また、江陵市健康家庭多文化家族支援センターでは、結婚して韓国に移住された日本人女性の方がお話をしてくださった。ご自身の経験から、韓国へ移住してきた人が現地での生活に適応しやすい環境づくりをしたいという思いでこのセンターで働いていらっしゃることに感銘したと同時に、そういった取り組みをしている施設があるということを知らなかった私は、今回こういった施設の存在を知ることができて非常に良かったと思う。

また、近年増えている東南アジアからの結婚移住者に関する話を聞いて、家族の在り方について改めて考えさせられたし、言語面や子どもの教育面だけでなく多面的で長期的なサポートが必要だと感じた。そして、原州市障害者総合福祉機関を訪問したことも非常に印象的だった。日本の障害者施設ではあまり見られない多様なプログラムが準備されていることを知って驚いた。特にバリスタの活動が一番印象的だった。施設にいながら一つの技能を身に着け、それを実践する場があることは非常に素晴らしいと思う。また、ここで日本文化紹介を行ったが、喜んでいただいたことが実感でき、私たちとの間に言葉がなくとも心で通じたような感覚がして、なんとも表現しがたい喜びを感じた。

このように様々な施設を訪問したが、その中でも私が特に印象に残っているのは、韓半島統一未来センターと烏頭山統一展望台を訪問したことだ。まず、韓国について述べる際に忘れてはならないのは、韓国と北朝鮮は世界唯一の分断国家であるということだ。地理的に日本は近いが、日本で生活していて分断国家が隣だという認識を強く持つことはなく、今回の訪問で実際に分断の歴史や現状を目にして分断国家という事実を改めて実感した。私はこれまで南北統一は非現実的なうえ、メリットが少ないと考えていた。そもそも、韓国は民主主義で北朝鮮は共産主義であるし、仮に統一しても核の危険性や、治安の悪化など様々な弊害が考えられるからだ。しかし、韓半島統一未来センターを訪問して、これまで私が考えてこなかった南北統一をすることで生まれるメリットについて学ぶことができた。例えば、未開発地での地下資源採掘や、大陸へ繋がるルートができ物流が盛んになることで経済的なメリットが生じる。このように良い面もあるが、正直私自身の考えとしては、まだ統一に関して不可能ではないかと考える部分はある。とはいえ、今回の訪問で新しい視点を得られてとても良かったと思う。次に烏頭山統一展望台へ行ったのだが、望遠鏡を使って実際に北朝鮮の人々が生活している様子を見ることができた。私たちが訪問した日は運良く天気が良かったため、はっきりと対岸の北朝鮮が見えた。この場所は川を挟んで数百メートル先に北朝鮮があり、何とも言えない緊張感があった。望遠鏡から農作業をしている人、自転車に乗って移動している人、家畜を連れて歩く人を見ることができた。望遠鏡の先にいる人たちは対岸から望遠鏡で見られていることはわかっているだろうし、望遠鏡で見た世界が真の生活ではないかもしれないが、それでも自分の目で見ることができたのは貴重な経験だった。

私にとってホームステイは初めての経験だった。韓国の家庭で過ごし、韓国の日常生活を体験できて非常に良

かった。韓国の親子関係を見て日本との違いを感じることができたり、日常のほんの小さなことでも新たな発見があり、とても有意義な時間を過ごせたと思う。もちろん楽しい思い出がたくさんあるのだが、それだけではなく考えさせられることもあり、それも自分を成長させる良いきっかけになった。私はこれまで日本に興味関心のある同年代の青年らと交流してきた。しかし今回、そうではない私たちの親世代の方との交流を通して、私がこれまで見てきた世界はごく一部だったと感じた。若い世代だけでなく、上の年代との交流・理解が進んでいけばさらに日韓関係が発展していくのではないかと強く感じた二泊三日だった。

これまで、韓国で学んだことについて述べてきたが、日本で団員と協力して派遣の準備を行った数ヶ月間も私にとってはとても大きな学びであった。私はこれまでこのような大人数で長期的に活動するプログラムに参加したことがなかった。この派遣団に参加すると決まった時はとても嬉しかったし、どんな学びがあるのかと期待していた半面、知らない人とこの派遣団を成功させなくてはいけないというプレッシャーや緊張感、不安もあった。私はこれまで何度か韓国を訪れたことがあったので現地での研修にはそれほど不安や心配な点もなかったのだが、団員の中には一度も韓国を訪れたことがなく、韓国語も分からないという人もいたので私より何倍も不安だっただろうと思う。しかし私を含め多くの人が、今回の派遣を成功させるために出会って間もない人と信頼関係を築きながら協力することは容易ではないと思っていただろう。事前研修が終わってから出発前研修まで全員で顔を合わせる機会はなく、文面でやり取りを行うことは誤解も生じやすいうえにそれぞれの連絡の頻度の差もあり、不安が募ることがあったのは事実である。また、係の仕事を期日までに正確に進めていくのは、非常にプレッシャーであった。しかし、それぞれの個人的なスケジュールをこなしながら、同時に派遣事業の仕事をしなければならないという経験は今後自分たちにとって大いに役立つと思う。また、係の仕事に追われている時や、良いアイディアが出ずに行き詰っている時に助けてくれる団員の存在がありがたく、とても心強かった。こうやって濃密な時間を過ごし、互いに高めあって成長することができ、本当にこの派遣に参加してよかったと心から思っている。韓国で学んだことを今後のさらなる日韓関係の発展のために活かすのはもちろんのこと、今回のこの派遣での出会いを大切にしていきたいと強く思った。

私たち既参加青年は、今回の派遣で得た経験をどのような形であれ、社会に還元していく必要があると思う。今回の派遣の目的に記されていたように私たちは、相互理解や友好の促進はもちろんのこと、国際社会の各分野でリーダーシップを発揮し、社会に貢献しなければならない。事後活動は、何から始めたらよいか少々迷ってしまうが、まずは身近なところから始めていけばよいのではないだろうか。私はまず、自分の通う大学でできることから始めたいと思う。冒頭でも述べたように、私はまず韓国について知りたいと思った。そこで、韓国に興味がある人に、今回の派遣で学んだことや、自分が韓国について知っていることを伝え、さらに韓国に興味をもってもらいたい。そして、大学内の国際交流の輪をさらに広げていきたい。また、今回の派遣事業の存在をもっと知ってもえるよう努め、それが次年度以降の参加に繋がっていけば嬉しいと思う。また、私自身将来は韓国と関わる仕事をしたいと思っているので、今回の経験を生かして日韓友好関係の発展の一端を担えるような存在になれたら嬉しい。また、事後活動を行うにあたって、IYEOに入会して既参加青年の方々と様々な活動をしていくことも、とても有意義な時間になると思う。自分自身の成長にもなるうえ、さらに人脈を広げることもできるだろう。これから事後活動を行っていくことは非常に楽しみである。

最後に、この派遣事業で出会えた団員、韓国で私たちを迎えてくれた韓国人青年、コーディネーターや通訳の方、私たちのために様々な準備をしてくださった方々など、全てに感謝したい。この縁を大切にしながら日韓のためにできることを考えて活動していきたいと思う。

ディスカッション成果

平成30年度　日本青年韓国派遣

ディスカッションの全体概要

日　時	9月8日　9:00－15:30
場　所	OLYMPIC PARKTEL（ソウル）
プログラム名	日韓青少年交流会
テーマ	**【多文化共生】** ＜外国人労働者＞ 　受け入れ問題とその先 ＜ジェンダー＞ 　女らしさ、男らしさ、自分らしさとは何か ＜宗教＞ 　両国の宗教事情を踏まえた上で、宗教・宗派その規模に関わらず、共存共生していくにはどのような社会を目指すべきか ＜障害者＞ 　障害がある人が、社会で共生していくためにはどうすればいいか ＜教育＞ 　教育上の問題点を挙げ、両国の相違点から改善策を見つけ出す
参加者	日本青年25名、韓国青年36名

日韓青少年交流会にて、ディスカッションをする

参加者	日本青年　5名、韓国青年　4名
トピック	＜外国人労働者＞ 受け入れ問題とその先
成　果	ディスカッションを通して、相手国を知ると同時に、自国に対する新たな視点を手に入れることができた。

1. 韓国の現状

・外国人労働者数は130万人。（2018年現在）

・韓国の就労ビザは比較的取りやすい。（大まかに分けると、専門性を必要とするビザとそうでない2つのビザに分かれる。）

・専門性を必要としない仕事の従事者へは雇用許可制という制度を設けて、3年から最長で4年10か月の滞在を認めている。

・外国人労働者受け入れにより生じるプラスの面として、少子高齢化に伴う人手不足の解消、人口増加による国の経済的発展があげられる。

・外国人労働者受け入れにより生じる問題として、不法滞在、犯罪率の増加、外国人労働者の人権問題、国家的利益の損失（就職困難）、受け入れ国の外貨の流出があげられる。（日本と共通）

・労働者は抱えている問題(特に、賃金未払い、セクハラなどの人権問題）があっても訴える場がなく、発言の機会を得られない。

・外国人労働者の人権保護のための活動として、各地域では、外国人に韓国の文化や言語を教える多文化センターを設立。

2. 日本の現状

・外国人労働者数は128万人。（2018年現在）

・技能実習制度を設けて、3年から最長で5年の滞在を認めている。

・様々な分野（建設、農業、介護、造船）での慢性的な人手不足が問題視されている。

・外国人労働者受け入れにより生じるプラスの面として、少子高齢化に伴う人手不足の解消、技術の紹介による国家のイメージ向上があげられる。

・外国人労働者受け入れにより生じる問題として、不法滞在、犯罪率の増加、外国人労働者の人権問題、国家的利益の損失（就職困難）、受け入れ国の外貨の流出があげられる。（韓国と共通）
また日本では、過労によるうつ、過労死も問題となっている。

・日本で最も問題視されているのは、不法滞在である。原因の1つとして、強制労働、長時間労働があげられる。

・多文化共生の促進活動として、外国人と共生していくための街づくりを行なっている。

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

・外国人労働者に対する不正が発覚した会社へ対しての不買運動をしてはどうか。

・外貨の流出は長期的に見れば、経済的なグローバル進出につながるのではないか。

・（韓国人において）単一民族という根本概念を捨て、国家に対しての認識を変える必要がある。

・文化や言語を教える多文化センターを訪れ、ボランティア活動をするのも良い。

・留学生サポーターのようなサポートを企業でも活用してみてはどうか。

4. 発表の内容

・日韓両国の外国人労働者受け入れの現状としては、韓国では雇用許可制（ビザの取得が簡単）を取り入れており、日本では技能実習制度を取り入れている。

・両国共通の問題として、犯罪・不法滞在、人権問題があげられる。

・その中でも、長時間労働、賃金未払い、強制労働、セクハラ・パワハラなどの人権問題が特に問題視されている。

・解決策としては、

まず身近なところからできることとして、ボランティア活動（言語・文化交流）や、学習（宗教への配慮）、サポート（1対1のサポート）があげられる。

また、情報発信という意味で、SNSを利用して外国人労働者へ関する制度を広めるといった活動も重要である。

それに合わせて、一人一人が多文化理解を深めていこうとする意識を持つことも大切である。具体的に個人ができることとしては、外国人へ対して差別的な言葉を使わないことや、様々な文化を持つ人と積極的に関わっていこうとする姿勢を持つといったことがあげられる。

外国人労働者グループ感想

私たちのグループは、自主研修中の準備の進め方として、週一回メンバー各自が自分が調べた内容（新しく知ったことや、自分が韓国側に聞きたい疑問点など）を共有し、意見交換を行う形をとっていた。それにより互いの知識を深めることができ、本番には班のメンバーがテーマに対しての知識の差がない状態で臨めたと思う。実際のディスカッションでは、韓国青年は皆しっかりと個々の意見を持っている印象があった。自国は勿論のこと、日本への知見も深く、私たち日本青年にとっては新しい視点からの日本を見ることができ、非常に新鮮だった。

私個人の韓国の人々へのイメージとして、意見の主張が強く、考えを明確に述べる印象が強かったのだが、今回討論した韓国青年たちの中にはそうではない人もおり、その様子を見て韓国人への印象が変わると同時に、自分の中で韓国人への偏見を持っていたことにも気付かされた。

ディスカッションの中でキーワードとなったのは、日本側は不法滞在に関する労働問題、韓国側は民族的な問題、特に朝鮮族や東南アジアからの移民に関してであった。文化や宗教への理解、外国人労働者を同じ雇用先の日本人が一対一でサポートする制度の提案、マイノリティとされる人々への差別的な言葉をなくすこと等が多文化共生社会を目指す上での案として挙がったが、日本と韓国の異なる土地であっても似たような解決方法が必要であることが分かった。

多文化共生を実現するための具体的な方法を議論していた際、韓国青年の中から「多文化共生を目指すのであれば、まずは宗教面で相手の信仰を尊重すべきだ」という意見が挙がり、日本において日本人として生活していると少し感じにくい、宗教についての課題の重要性を深く考え直す機会となった。そのような、個々の習慣や伝統文化を理解した上での細かな配慮こそが、多文化理解へつながっていくのだと感じた。

今回意見交換の最中に、韓国青年側から日本の現状について聞かれても答えられなかった部分があったため、他国を知ろうとする前に自国への理解を深める必要があることを学んだ。

また、討論の中で話し合った個人にできることを身近な場面から実践し、日本で疎外感を感じている外国にルーツのある方々や、マイノリティと呼ばれる人々と共に協力して生活できる社会をつくりたい。

そのために、まずは日本人を対象に異文化への理解を促進し、誰もが住みやすい社会のために貢献していきたい。

参加者	日本青年　5名、韓国青年　5名
トピック	＜教育＞ 教育上の問題点を挙げ、両国の相違点から改善策を見つけ出す
成　果	両国の教育問題の違いを認識するにとどまらず、お互いに良い点、学ばなければならない点を見つけることができた。

＜英語教育について＞

1. 韓国の現状

・大学入試のための勉強をしているため、聞き取りはできても話すことができない。
・TOEICやTOEFLなどの試験ごとに基準や違いがあり、そこをどうするかが問題視されている。
・幼稚園児の頃から英語教育をさせられるが、幼い時に英語の勉強をやりすぎて母国語ができなくなることもある。
・文法など基本的な学習で、英語教育ではなく英語学を教えている。
・英語ができない人はどうしようもない人だと思われる社会になっており、英語はできて当たり前という認識になっている。

2. 日本の現状

・大学入試のための勉強、授業ばかりで聞き取り、読解が重視されるため会話ができない。
・海外留学を経験している英語教師が少ない。
・英語圏でなかったり、日本よりも勉強していなかったりしても英会話ができる国はたくさんあるが、日本人は英会話が苦手。
・外国語指導助手（ALT）が有効に活用されていない。
・英語検定準1級、TOEIC600点以下でも教師になることができることから、教師の英語レベルが低い。

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

・韓国は大学の卒業条件としてTOEIC600点が挙げられる。
・日本では英語の授業を一切聞かなくてもいい大学もあり、TOEICが600点あれば成績がB、800点でAがもらえるところもある。
・TOEICのハードルが両国でこれほどまでに違う原因は何か。
　→・韓国では履歴書に書くために、点数を取るためのスキルやテクニックを教えてもらえる。
・韓国は企業文化や、就職率がとても低いことから、働くためには英語の勉強をするしかない。
・韓国の大企業に就職するなら、応募の基準とされているのはTOEIC600－700点だが、ほとんどの人は800－900点ある。
・日本は日本国内だけでも生活し食べていけるため、英語の勉強をしなくても大丈夫だという気持ちがある。
・両国で英会話ができないことは問題視されている。
　→・韓国では、5年前に聞き取り、読み、書き、話しの全てを入試試験に導入するという案もあったが、学生の負担が大きくなるということから廃止になった。
・日本では2年後には英語検定に会話の点数を導入するつもりだ。
・英語の実力のある先生の導入をしても、入試のための授業になってしまったら意味がない。
・幼い頃から家庭内で10分程度でもいいため、負担にならない程度に英語のアニメなどを見させる。
・耳の発達を考えると、小学生からでは間に合わない。

4. 発表の内容

英語力を高めるために次のようなアイデアを発表した。
・会話ができる人が少ないため、入試試験で英語については会話を導入する。
・幼い時にアニメや音楽などで英語に触れさせて、接点を早くさせる。
・英会話のできる教員の採用。
・国公立幼稚園での英語教育の義務化。
・センター試験の点数のみならず、資格やTOEICなども点数の対象にする。

教育グループ感想

私たちは、日本と韓国の教育問題についてディスカッションを行った。あらかじめテーマを日本で問題となっている学歴・偏差値、英語教育、モンスターペアレント、いじめ、奨学金の5つに縛り、各自事前に調べ学習を行った。ディスカッション当日、特に英語教育について日韓両国で共通して問題を抱えていたため、英語教育問題に重点を置いて議論をした。その結果、両国とも入学試験の対策に特化した英語教育を行っていた。このことから、聞き取りや読解を中心に授業が進行され、どれだけ勉強をしても会話が上達しないという問題が生じていることが分かった。本来、英語を学ぶ目的のひとつは、英語を使って他国の人と交流することである。学校で英語を勉強しても、交流に不可欠な会話ができないというのは、致命的ではないかという問題提起もなされた。このように両国で共通する問題が見受けられる一方で、両国の英語に対する意識の違いについても詳しく知ることができた。韓国では企業文化や、就職率の低下によりTOEICの点数や資格が重要であり、企業の募集要項に書かれている点数よりもはるかに高い点数が要求される。また、働くためには英語の勉強をせざるを得ないと考えるほど、会社や世の中全体が英語は必須という考えを持っており、就職活動をする上で、英語が非常に重要視されていることが分かった。一方、日本では履歴書にTOEICの高い点数や資格が書いてあれば有利だが、必須という考えまではない。英語ができなくても日本で就職して、生活ができることから、英語を勉強しなくても大丈夫であると考える人もいる。これらのことから、韓国の就職難の現状は想像以上に深刻なものであると知り、海外に出ていかなければならないために必須化されているという、社会構造上の問題にも関わってくるのではないかと考えた。上記では主に、英語教育の問題について取り上げたが、ディスカッション全体を通して、両国の教育問題の違いを認識するにとどまらず、お互いに良い点、学ばなければならない点を見つけることができた。さらにそこからそれぞれの国での解決策を各々が親身になって考えられたことは、貴重な体験となった。

分科会の概要

参加者	日本青年　5名、韓国青年　5名
トピック	＜宗教＞ 両国の宗教事情を踏まえた上で、宗教・宗派その規模に関わらず、共存共生していくにはどのような社会を目指すべきか
成　果	両国の宗教事情、文化及び慣習について、違いと共通点を知ることができた。具体的な事件や出来事を通して、より深く相手国を理解する事ができた。両国の今後の政策及び対策を同じ方向で考え、共有することができた。両国の未来について考え、多文化宗教について模索することができた。宗教問題の政治的背景や社会的背景から議論することができた。問題解決のための妥協点を探ることができ、全員が積極的に議論に参加することができた。

1. 韓国の現状

2015年度の調査によると、無宗教、キリスト教、仏教、カトリックの順に信者が多い。国民の間には、単一民族という意識が強く根付いているため、他国の宗教の受け入れを容易に行うことが不可能である。過半数の国民が無宗教ということが明らかとなり、また、国民は宗教的な生活を日ごろから行うことに抵抗を感じる人が多い。

問題としては、ある宗教の信者が犯罪を行うケースが頻繁に行われていた。中には、学校の理事長が学生の反対運動を押し切って、宗教を背景に問題を起こしたこともあった。

韓国では、クリスマスや釈迦が生まれたとされる日を祝日として定めており、日本と少し異なる。また、近年の国際化に伴い、特にイスラム地域から難民という名で済州島を中心に、不法滞在者が社会的に影響を及ぼしているということがニュースとなった。この件に対しては、韓国に来たからには韓国の習慣に合わせるべきであるという意見を持つグループと、不法滞在者の文化をある程度、受け入れる必要があるというグループに分かれる。どちらかと言えば、後者が多い。さらに、違法な難民申請が多いため、これらの問題を解決するためには、制度をより整える必要があると思われる。

2. 日本の現状

日本で信者数が多い宗教は、仏教、神道、キリスト教の順であり、その信者の人口に占める割合は人口の1.5倍となるため、同時に複数の宗教を信じている国民が多いと判明した。そのため、それぞれの宗教の良い面のみを実施していることが推測される。一方、オウム真理教等カルト教団の事件により、日本国民の間では宗教に対して悪いイメージが定着しているため、国民の大部分は、無宗教であると主張する。

また、日本では難民や移民の受け入れに対して否定的な意見が圧倒的に多く、制度的にも非常に厳しい。その原因の一つとして、宗教があると考えられる。

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

一つの意見として、宗教を幅広く受け入れることも必要であるが、無条件にそれらすべてを受け入れる必要はない。特に、人道的に非難されるような慣習を用いた宗教は、むしろ受け入れるべきではなく、宗教といえども、その国の慣習に合わせる必要があるのではないだろうか。

韓国では宗教の自由という法律があるが、他人の権利が侵害されるような内容は、法律的に処罰も整える必要があると思われる。

また、代表的な宗派や宗教に対する知識を蓄える必要があるのではないかという意見もあった。

韓国の現状として、キリスト教や仏教に関連した祝日を設けているが、今後、国内に新たな宗教が増えた場合、その宗教が国民生活に与える影響が少ないものであれば、祝日にはならないと考えられるため、公平性を欠くのではないだろうか。

両国の歴史的背景から、日本は仏教的習慣、韓国では儒教的習慣が根付いていることが分かった。これに関しては、両国民とも宗教活動をしているという意識を持ち合わせてはいない。

先述の韓国では、クリスマスが祝日として制定されている件に関しては、キリスト教の影響力が強いからという理由により祝日として制定されたわけではない。

韓国側の解決策

教育：難民や移住者を理解するための授業を中学校・高校・大学で実施する。幼い子供だけではなく、私たち大学生も必要である。

支援：制度的な改善も必要ではあるが、今後増えるであろう多文化家族のためにも積極的な経済支援等を行う。

日本側の解決策

教育：宗派に関わらず、最低限の知識を得ることができるように義務教育の一環として宗教の授業を平等に実施する必要がある。

メディア：悪いニュース等報道による影響が大きいため、メディア側もそのような点に関しては意識する必要がある。しかし、悪いニュース等の報道は記憶に残りやすいということも踏まえると、仕方がない面もあるのではないか。

青年としてできること

SNSでの発信や、大学の授業を通して勉強する姿勢、他国とのつながりを進んで発見し、イベント等に参加する。(＝宗教と関わりを持っている人との交流。)

4. 発表の内容

両国間での宗教事情を踏まえると、共通点を多く見つけることができた。中でも、改善すべき点として、教育が必要であるという認識も一致した。そこで、今回の発表では、国が政策として「教育」を進めていくというものから私たち青年にも実現可能なことまでを発表する。

私たちにもできる具体的なこととして、SNSでの日ごろ関わりの少ない宗教や国の文化を紹介するページを作成する。また、自分が学生である場合は、授業の組み合わせ等で宗教や文化に対する自らの理解を深める。さらに、実際に海外に足を運び、観光も含めて宗教関連施設を一緒に見学する努力をする等が挙がった。

宗教グループ感想

今回私たちのグループでは、「宗教」をテーマに、現代の国際化が進む日本と韓国の国内事情を踏まえて、今後さらに加速していくであろう「多宗教化」の中で、どうやって共生していくかを中心に、ディスカッションを行った。

まず始めに、日本側からの宗教事情の説明を行い、その後に韓国側からの報告を行った。日本側は、事前に韓国側の宗教事情についても調べていたが、キリストの行事（クリスマス）や仏教の行事（4月28日）が祝日であること、さらには、儒教は韓国文化に根付いたもので、実際に儒教を信じる信者はほとんどいないこと、加えて、考えていたよりも無宗教者が多かった点に驚きを感じた。

両国で調査発表をした後は、実際に起きた問題や事件について議論した。議論していく中で、カルト教団に関する事件は、両国ともに多く発生していたことが分かった。また、そうした宗教団体による勧誘活動が問題となっていることも共通点として挙がった。ただし、問題点としては、日本の方がより「宗教」に対して、悪いイメージが蔓延している現状や、日本国民の方が、どちらかというと「宗教・信仰」に関して、興味・関心が少ないように感じた。

最後に、両国の中でより「多宗教共生」を実現するためには、どうすれば良いか、具体的に解決策を話し合った。解決策に関しては、日本側と韓国側でそれぞれ話し合う時間を設けて、発表する形式にしたが、結論として教育の中で、より「宗教」に関して、平等な考えを身につけることができるようなプログラムや授業を用意することで一致した結論が出た。また、私たち青少年にもできるような解決策としては、まず①SNSを使った、宗教を含め、その国にとってあまり馴染みのない情報発信やHPの開設。②大学生や学生は、自らが進んで宗教に対して理解できるような授業を聞こうと努力すること。③積極的に海外に足を運ぶだけでなく、できれば現地の宗教関連施設にも意識して、実際に行ってみる。④両国国内でも、積極的に交流会やイベントに参加することで、他国の文化から「宗教」についても、知る機会を設ける。⑤大学のゼミなどを通して、大学生が自ら小学校や中学校で、授業を行う。以上の五つの解決策があがった。

全体を通して、日本と韓国の「宗教」に関して、共通点が多く、一緒に解決策を考え共有することができたので、充実したとても良いディスカッションになった。

参加者	日本青年　5名、韓国青年　7名
トピック	＜障害者＞ 障害がある人が、社会で共生していくためにはどうすればいいか
成　果	相手国のみならず自国に対する新たな視点を手に入れると同時に、両国が協力して取り組むべき点を見つけることができた。

1. 韓国の現状

・日本は1970年に障害者制度ができたのに対し、韓国は1981年と歴史が浅い。
・日本の制度を参考にして作成されたため類似点が多い。
・現行の制度の中で障害者の雇用制度がよい結果をもたらしている。(①障害者の義務雇用 ②国が職業訓練をする支援雇用 ③障害者を雇用する企業に対する事業者支援 ④障害者自身が会社を設立するのを助ける支援)
・障害者の特殊学校を新設することに対する地域からの反対（地域の雰囲気が悪くなる、地価が落ちるなど）があり、交通の便が悪い山奥などに建てられる現状。
・「障害者」という言葉自体に対する賛否。

2. 日本の現状

・国としては障害者を保護する目的で制度を作るのではなく社会に進出し自立できるように後押しするという考えが根本にある。
・障害者自立支援法：一般就労に移行することを目的とした職業訓練や福祉サービスを提供。
・内閣府が実施した世論調査によると、「障害者が社会でともに生きることは当たり前だ」と答えた人が約9割だったのに対し、「世の中には障害を理由とする差別や偏見があると思う」と回答した人が8割を超えた。
・義足や義手をファッションととらえる新しい取組みが行われた事例が多々ある。
・障害者の介護が家族を中心としたものになっている現状があり、障害者家族に対する支援も必要とされている。

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

・日韓共通で一般の学校に障害者の支援学級はあるが、隔離的だというイメージがある。
・一般学級に障害のある児童が入る場合、友人たちから適切な支援を受けられる場合もあるが、いじめの対象になる場合もある。
・身体障害者に対する手助けの方法がわからない。むやみにサポートをしてしまうと障害者の気分を害することもある。

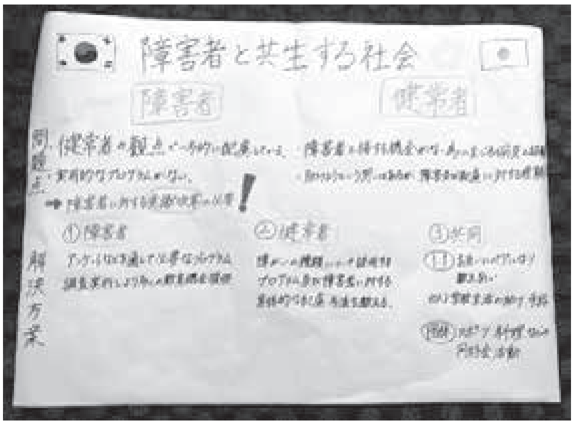
4. 発表の内容

・問題点
健常者：障害者に対する配慮の仕方がわからない、障害者と接する機会がないために偏見や誤解が生じる
障害者：健常者の手助けが一方的なものになっている、実用的なプログラムがない
・意識改革への解決策
① 障害者対象：アンケートなどを通して障害者目線で必要なプログラムが何かを知る
② 健常者：障害の種類に関する説明を聞く、具体的なサポートの方法について学ぶ
③ 共同：障害者と健常者でペアになり手話などを教える、スポーツや料理などの同好会をつくり交流活動をする

障害者グループ感想

私のグループのテーマは「障害者」であった。まず事前準備としてそれぞれが分担して制度や時代背景、世論などの気になる分野について調べていった。分野別に分担して調べることはやることが明確でありさらに多くの情報を集めることができ良かったと思う。また準備期間中にブラッシュアップが三回あり、より深く学べたと思う。今回が私にとって初めてのディスカッションだったのでいろいろな発見をすることができた。事前準備の情報収集の際グループで個人が調べてみて感じたことや相手が調べたことについての感想などを話し合ったのだが、そこで一つのことに対しても色々な視点や意見があることを発見した。色々な視点や意見を聞くことで物事に対する固定観念を取り払うことができた。事前準備の際、私は障害の定義や種類、制度、地元で行われている障害者に対するサポート等を調べた。調べる中で自分が知らないことや思っていたことと異なる事実が出てきたことに驚いた。また同じチームで義足・義手について調べた人は日本の技術が進んでいると思い、日本が行っている取組みを韓国に伝えたい気持ちで調べていたが、日本はまだまだ進んでいない事実を知り同様に自分が思っていたこととはいかに違う事実があるかを知ったという。

ディスカッションをする前の韓国に対しての印象は障害者に対する認識が薄くあまり進んでいないと思っていた。韓国の方とディスカッションをして制度的な面では韓国と日本は似ているということを感じた。似ている理由は日本の制度を参考にして作っているためであることが分かった。しかし、公共交通機関の了解や就労などの問題はそれぞれが相手国を見習うべき点もあるのだと分かった。少し残念だったのは色々な分野を調べてきたのだがディスカッションの中で一つの分野で深く話し合いをしすぎて自分たちが調べてきたことをすべて伝えることができなかったことだ。今後はもう少しテーマの範囲を小さくしてディスカッションをするのが良いと学んだ。韓国の人とディスカッションをしてもっと自分たちの国について学んでいかないといけないと思った。障害を持った方々が不自由なく暮らせるような多文化共生社会を実現するためには日韓それぞれがお互いの国の見習うべき点やサポートできる点を共有しあう必要があると感じた。



テーマ	多文化共生
参加者	日本青年　5名、韓国青年　8名
トピック	<ジェンダー> 女らしさ、男らしさ、自分らしさとは何か
成　果	一つのテーマに関して、お互いの国からの異なる視点でもって議論をしたことで、新しい視座を手に入れることができた。

＜韓国で現在関心を持たれている問題＞

1. 韓国の現状

①妊娠中絶が違法
→女性の選択権がなく、選択の自由に関してデモが起きている
②相手の同意を得ない盗撮
→盗撮自体も大きな問題であるが、女性が被害を受けた事件よりも、男性が被害を受けた事件の方が警察が迅速に動いたことに対して男女平等でない、とデモが起きている
③女性を嫌悪する言葉がつくられ使われている
→マムチュン：マナーの悪い母親を呼ぶ
→キムチニョ：経済的に家族や恋人に依存して贅沢に生活する女性を見下して呼ぶ
④脱コルセット問題
→美的基準があまりにも統一されていて、厳しすぎる
→脱コルセット運動とは、職場での化粧強要など女性の抑圧文化から解放を叫ぶ運動のこと
きっかけは江南駅殺害事件
⑤女性を一人の人間としてみなしていない
→性的対象化
⑥性的固定概念

2. 日本の現状

①妊娠中絶は違法ではないが、若いうちに妊娠すると周りから白い目で見られる、というようなこともあり親など信頼できる大人に相談しにくい
②リベンジポルノなど日本でも問題になっている
ネット上にアップされてしまえば決定的な解決策はなく、自分で自分の身を守ることが重要になる
③女性を嫌悪する言葉はないが、妊娠した女性が同性からも異性からも受ける嫌がらせ（マタニティハラスメント）が問題になっている
④日本にも多くの人が抱く理想像はあるが、社会的に決められているわけではない
⑤日本にも性的固定概念、性的役割分業がある

＜LGBT、性的マイノリティー、自分らしさと容姿＞

1. 韓国の現状

・職場で出産休暇を取るのは難しい
・妊婦席が電車にある
・LGBTのカップルがSNSで自分たちの日常を公開
・ネットでトランスジェンダーをゲストとして呼ぶライブ放送がある
・美意識が高い
・整形費用は安くはないが、季節などによって割引などのイベントがある
→友達と行くと割引、入学式前は○％オフなど
・外見が就職活動に影響することもあり、大手企業がブラインドテスト（履歴書に顔写真、学歴、家族関係、身長体重などを書かない）を実施している
・公務員の採用試験でブラインドテストを実施したところ、女性や地方出身者の割合が増えた例もある

2. 日本の現状

・LGBT、性的マイノリティーについてカミングアウトしにくい
・法律では同性婚は認められていない
・オネエタレントなどの活躍

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

・日本、韓国共に、男性はこうあるべき、女性はこうあるべき、という性的固定概念が根強く残っている
・性的固定概念もあるため、LGBTなど性的マイノリティーはカミングアウトしにくい
・自分らしさ、は周りから自分がどうみられるか、を考えると表現しにくいこともある
・美意識の高さは時に当該者を苦しめることがある

4. 発表の内容

問題点
　男女共に性的固定概念がある
　LGBTに対して関心がない
　　当該者：カミングアウトしにくい
　　第三者：正しい知識、倫理観を持っている人が少ない
解決策
　個人レベル　・SNSやネット上で嫌悪表現を見かけたら通報
　　　　　　　・性的固定概念をなくす
　　　　　　　・LGBT、を認める雰囲気づくり
　　　　　　　・LGBT、の行事に参加
社会レベル《教育》
　　　　　　　義務教育段階での、男女平等、LGBT、についての教育
　　　　　《法律》
　　　　　　　同性婚を認める

ジェンダーグループ感想

　私たちジェンダーグループでは「女らしさ、男らしさ、自分らしさとは何か」をトピックとして、日本と韓国の両国の現状や抱えている問題、また解決策についてディスカッションを行った。
　事前学習では、有意義な議論を行うために私たちはグループの中で順番を決め、週一でその週の担当者がジェンダーについて自分が気になること、最近話題になったことなどについて調べてまとめたことをグループラインで共有、そしてほかのメンバーが質問をしたり、意見を言い合ったりした。メンバー5人がそれぞれ興味を持ったことに関して調べてくるので、一口にジェンダーについて、と言っても内容は様々なので多岐にわたる分野についての知識を得ることができた。また定期的に連絡を取り合うことで、ディスカッションに対するモチベーションも維持できたので、効果的な準備方法だったと考えている。
　私が実際に韓国青年と議論を行ってみて印象に残っているのは以下のことである。
「性的固定概念」の話をしている際に、韓国青年から、日本人が使う「女子力が高い」について、その言葉についてどんな印象を持っているの、と聞かれたことだ。私たちは普段何気なく使う言葉だったため、こういう印象、とははっきり答えられなかったが、何となくいいイメージであると答えると、韓国青年から、現在の韓国で女子力が高いと言うとジェンダーセンシティブの意識からよく思われない、と返された。ディスカッションをするまでは、日本と韓国のジェンダーに対する意識は大きく変わらないと考えていたが、言葉一つを取ってみてもそれに対してどんな印象を抱くか、その言葉の影響力をどのように考えるのかが違うのだと感じさせられた。また、その質問も、おそらく日本人だけでディスカッションをした際には出ない意見であったと思うのでとても新鮮で強く記憶に残っている。
　ディスカッションを行う際、ジェンダーをテーマに挙げると、難しく自分とは縁遠いものと考えがちである。しかし、今回短い時間ではあったが韓国青年との話し合いで国レベルの問題や解決策を考えるのと同時に、個人レベルの問題、また、明日から私たちができる解決策を考えたことで、ジェンダー問題を身近に感じることができた。一人ひとりが当事者意識をもってこの問題について考えていくことが、自分が暮らしやすい、みんなが暮らしやすい社会をつくる第一歩になると思う。